

「つながり」を実感させる広州日本人学校

前広州日本人学校 教諭

愛媛県今治市立吹揚小学校 教諭 越智俊介

キーワード つながり、交流、研修

赴任校の概要（2023年5月1日現在）

学校名・日本語：広州日本人学校

学校名・現地表記：広州日本人外籍人員子女学校

URL：http://www.jsjgcn.com

児童生徒数：小学部279人、中学部81人、合計360人

1 はじめに

「在外教育施設未来戦略2030 ～海外の子どもの教育のあるべき姿の実現に向けて～（令和2年6月3日 文部科学省 在外教育施設の今後の在り方に関する検討会 6ページ）」によると、海外で学ぶ子どもの数は、「昭和46年から令和元年にかけて、日本人学校の児童生徒については、2,433人から19,703人と8.1倍の増加、補習授業校の児童生徒については2,384人から21,717人と9.1倍の増加とある。日本と同じ教育環境で、生活に困難さを抱えながら海外で学び続ける子どもたちのために、これまでの経験を生かして力になりたい、そして、これまでの自分を見つめ直してできることを増やしたいと考え、在外教育施設への派遣を希望した。広州で過ごした3年間での取り組みや学びについて紹介したい。

2 5つのつながり

右は、2023年度学校便り「穂学」の記事に掲載された学校経営のエンブレムである。5つのつながりでGOALを目指す、校長の経営方針に基づいて、日々の授業や学校行事に取り組んだ。以下にその一部を紹介する。

(1) 子どもと教師とのつながり

① 教職員の出迎え、見送り

広州日本人学校は、原則通学バスでの登下校である。登校時や下校時には、職員が待機所に行き、子どもたちの送迎をしている。「今日も登校してくれてうれしいよ。」「1日よくがんばったね。」そんな気持ちで子どもたちと接することが、学校の温かい雰囲気づくりにつながっている。

② 休み時間

子どもたちはグラウンドでボール遊びや鬼遊びをして楽しく過ごしている。そこには、多くの教員が一緒に活動していた。子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごすことは、よりよい関係づくりにつながるだけでなく、教室では分からない子どもたちの様子を知ることでもできた。



<学校経営のエンブレム>

学校経営方針（スローガン）
「つながりを未来に実感させる広州日本人学校の創造」

- ① 子どもと教師とのつながりを大切にする。
- ② 子どもと授業とのつながりを大切にする。
- ③ 子ども同士のつながりを大切にする。
- ④ 子どもと保護者、日本人社会とのつながりを大切にする。
- ⑤ 子どもと中国とのつながりを大切にする。

③連絡帳

明日の準備物や連絡事項などを連絡帳に書いていた。そこに、担任から子どもたちに今日がんばったこと、できるようになったことなどのメッセージを添えて子どもを認め、励ますことで、子どもだけでなく、保護者との信頼関係を築くようにした。

(2) 子どもと授業とのつながり

①学年間の交換授業

3年生では、よりよい授業を実施するために、学年間で国語と算数の交換授業（一部の単元）を行った。子どもたちは、普段とは少し違う雰囲気の中、わくわくした気持ちで授業に臨むことができた。また、学年全体の授業の様子や学力の傾向を知ることもできた。

②ICTの活用

2022年度はコロナ禍のため休校になることがあった。「学びを止めない」を合言葉に、ロイロノート（ロイロノート・スクール）での授業配信を行ったり、Microsoft Teamsでオンライン学習をしたりした。たとえどんな状況であっても、みんなと一緒に授業をすることで、学ぶ楽しさを味わわせることができた。

(3) 子ども同士のつながり

①交流

総合的な学習の時間の学習内容を発表する場として、上海日本人学校と愛媛県今治市立鴨部小学校との交流を行った。地域が異なる小学生とつながることで、それぞれの学校での学びの様子や地域の様子を知ることができ、学習意欲を高めることができた。

②縦割り班活動、通学バス

小学部では縦割り班を作り、一緒に弁当を食べたり、休み時間に遊んだり、集会を実施したりした。また、通学バスでは、中学部生徒がリーダーとなって全体にアドバイスをしたり、学校生活の様子を伝えたりした。学年や学部を越えた関係づくりをすることができた。

(4) 子どもと保護者、日本人社会とのつながり

①夏祭り

2022年度まではコロナ禍による制限があったが、保護者、企業などを含め、約800名で開催することができた。実験教室、読み聞かせ、ダンスの発表、かき氷の販売など多くのブースが設置された。日本の夏を感じられる行事で、子どもたちが楽しみにしている。

②校外学習

広州市近辺には、様々な施設がある。総領事館、水族館、ショッピングセンター、アイスクリーム工場、自動車工場など、各学年が生活科や社会科などの教科と関連させた校外学習を行った。広州にいるからできる学習を実施することで、学びを深めることができた。

(5) 子どもと中国とのつながり

①現地校との交流

コロナ禍のためオンラインでの交流を実施していたが、2023年度には対面交流が実現した。各教科、外国語、中国語など、学校で学んだことを生かして会話をしたり、



現地校との交流会

一緒に授業を受けたりして交流を行った。日本では実感することができない、貴重な経験をする事ができた。

② 中国語の授業

週に1時間、中国人講師による習熟度別学習を行った。日常生活で使う挨拶や単語などの学習に加え、春節用の飾りを作ったり、中国の昔話を聞いたりすることで、中国の文化を学び、日本との違いやそれぞれの国の良さを感じることができた。

3 教員のつながり

在外教育施設への派遣は長期研修であるため、授業のスキルアップを図ることが求められる。教師の授業力向上のために、各地から集まる教員同士の学びは、これまでの経験で確立された自分の指導方法を見直し、より良いものにしていくために有効な方法であった。

(1) Microsoft Teamsの活用

学力向上部長の提案により、各自の授業実践を投稿するチャンネルが作られた。他の教員の授業を参観して学ぶことは、授業力向上に直結するものである。しかし、子どもたちや保護者への対応、授業準備などがあり、普段の授業を毎時間見に行くことはできない。そこで、自宅から学校までの移動時間や空き時間などをうまく活用してこの投稿を見ることで、授業実践、朝学習の内容、共有したい図書の紹介、板書の仕方などを知ることができた。若手教員だけでなく、中堅教員にとっての学びとなり、授業改善に生かすことができた。また、他学年の活動内容を知ることで、子どもたちに声を掛けて励ましたり、感想を伝えたりする機会が増え、子どもと教員のつながりを深めることにもつながった。

(2) 初任者研修

広州日本人学校は、文部科学省派遣、学校採用に関わらず、若手教員の割合が高い。教員経験が浅い教員も少なくない。そのような中、学校全体のレベルアップを図るために、若手教員を育成することは学校にとって重要な責務である。学校では、初任者研修担当教員が中心となって、研修計画を立てた。2・3年目の教員が講師となり、生徒指導、学級経営、児童理解など、初任者に伝えたい様々なテーマを設定して、講習・研修を行った。若手教員の学習の場としてだけでなく、講師を務めた教員も、資料作成の技術や伝える力を高めることができた。以下は、私が伝えた内容の一部である。

① 板書（広州日本人学校ではホワイトボード）

- 正しい文字（字形・筆順・大きさ）で、板書ができています。
- 書き方をなるべくパターン化し、単元を見通して板書する。

② 授業開始パターンを決める。

- 授業始めの5分間は、前時の復習問題やドリル問題を解く。
- その間に教師が日付、学習内容、めあてを板書し、スムーズに本時の学習に進む。

③ 教師の言葉

- 指示は短く、できたら褒める。
- 教師の言葉は、子どもの将来の言葉につながる可能性がある。「やばい」「うざい」「まずい」「（文頭の）なので」などの言葉は使わないようにする。

④通信

- 授業参観や懇談会の回数は限られているため、教師と保護者をつなぐ架け橋にする。
- 保護者が見たくなる記事、見る必要性がある記事、学びになる記事を書くことを心掛ける。

⑤『日本の教師に伝えたいこと（大村はま1995）』より引用

若手教員だけでなく、自分自身への戒めのために、次の内容を紹介した。

- 愛情とか熱意とかは、ごく当たり前のこと。いい人であるということも、当たり前のこと。別に教師という専門職の資格とは言えないことでしょう。教師は、やはり、学力をつける人、学力を養う技術を持った人です。いい人だけでは、職業として成り立ちません。
- 教師の仕事はこわいもので、あり合わせ、持ち合わせの力でやっても、やさしく、あたたかな気持ちで接していれば、結構、いい雰囲気を作れるものです。いい教師で過ごせるものです。そこが、こわいところです。端的に言えば、あり合わせ、持ち合わせの力で、授業をしないように、ということです。何事かを加えて教室へ向かい、何事かを加えられて教室を出たいと思っています。

⑥教師の成長=子どもの成長

- 学ぶ気持ち+自分を見る（振り返る）+謙虚な気持ちを忘れない。
- 分からないときは聞き、自分に合った指導方法を見付け、自分の力をプラスしていく。

(3) スキルアップ研修

教務主任の提案により、他の教員がもつ専門性や知識、実践などから学び、自らのスキルアップに役立て、日々の教育指導や学級経営などに生かすことを目的として始まった研修である。研修内容は、教科に関すること、特別支援や教育相談など様々であった。初任者に限らず、多くの教員が参加して、お互いの技術や教育観を話し合うことができた。

私が11月に行った研修は、「少しの思いやり」をテーマとした。在外教育施設でも、個別の支援を要する児童や言語に困難さを持つ児童がいる。また、教員も海外で生活しているため、限られたコミュニティの中で過ごしていることが多い。そこで、教室にいる全ての子どもたちの笑顔を増やすために、教師として何ができるかについて考えること、そして、教員同士の関わりについて考えることを目的とした。

①『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（令和4年）』（文部科学省報道・報道発表）より

学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒以外にも、特別な教育的支援を必要としている児童生徒がいることを念頭にどのような支援を行うことができるのか検討することが大切である。

② 数字を覚える活動、絵を描く活動

理解する・判断する力・方法は人それぞれであり、教室には、様々な個性を持つ子どもがいる。だからみんなで学ぶ、みんなができたという気持ちを持たせることが大切である。また、お互いを理解し、認めることで、自己肯定感を高めることが大切である。

③ 子どもだけでなく、職員も

「何か手伝うことはありますか」、「先生の授業の進め方、とても参考になります」、「ありがとう」などの何気ない一言を交わすことが大切である。

(4) 研究授業

研究主題の達成に向けて、1人1回の研究授業を行った。授業は毎回動画として録画し、保存した。参観でしなかった教員も研究協議までにその内容を視聴し、自分の考えをまとめて協議に参加することができた。また、研究協議では、ロイロノートの共有ノートを活用し、成果や課題などの意見を出し合った。

4 おわりに

「夢のような時間の始まりです。」

これは、派遣前に先輩にいただいた言葉だ。言葉も地域の様子も分からず始まった中国、広州市での生活。新しい生活に慣れるために必死で、先輩からたくさんのことを教えていただいた1年目。少しずつ学校のことを把握できるようになり、責任ある職務を与えていただいた2・3年目。派遣させていただいた3年間は、本当にあっという間の出来事で、夢のような時間であった。

帰国時、広州でがんばる子どもたちの力になることができたのか、本当に精一杯のことができたのだろうかと思不安な気持ちに駆られた。一方、「来年も先生が担任だといいな。」「先生の授業が分かりやすかったです。」という子どもたちからのメッセージ。そして、「先生のことが大好きだったようです。」「きめ細やかな対応で、とても安心できました。」という保護者からの温かいメッセージ。出会った子どもたちや保護者のためにできたことが少しはあったのかなという達成感もあった。

海外派遣は、教員として、また人間としてのスキルアップを図ることができる本当に貴重な機会である。そのような機会を与えていただいた文部科学省をはじめ、愛媛県教育委員会や、今治市教育委員会の方々への感謝の気持ちを忘れず、これから出会う子どもたちの笑顔のために努力し続ける教員でありたい。そして、「夢のような時間」を「夢」で終わらせることなく、広州日本学校での学びを、地域の子どもたちや学校全体のために役立てていきたい。